



何を情報源にするのか？

矢野(五味)晴美

自治医科大学臨床感染症センター感染症科准教授

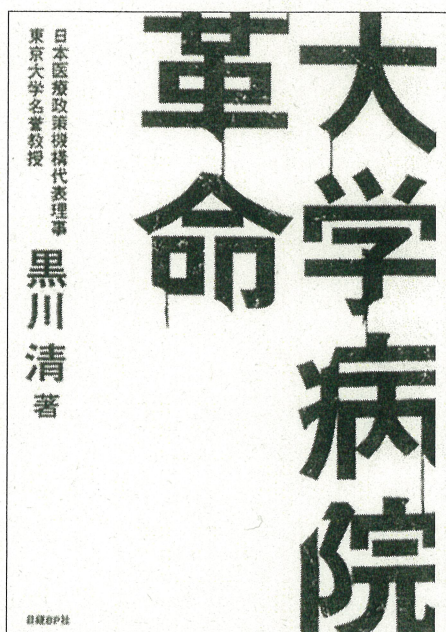
『大学病院革命』

著：黒川 清

228 ページ，2007 年

定価：1,365 円(税込)

日経 BP 社，TEL：03-6811-8000(代)



医療に携わる学生，医療従事者のかたに共通して，いつも，聞きたいことがある。それは，「何を情報源にするのか」「あなたはどのアリーナ(地域，ステージ)で生きているのか」「あなたの思考はどの範囲でのものなのか」(つまり，日本のある一地域でのお話ですか？ 日本だけでのお話ですか？ 世界で通用しているお話ですか?)ということである。

グローバル化が進行し，世界がほぼひとつになり，情報の共有が極めて容易になった現在では，一体「どの範囲で」ものを考える必要があるのか，というところに行き着くのではないか。

■「世界の潮流」を把握する

私は，日本にちょうどインターネットが普及する直前の1995年に渡米し，Webが非常に普及した米国で長年過ごした経験がある。そのため，在米中は常に米国中心の思考回路になっていた(そのよしあしは別として)。良かった点は，それが常に世界を想定した思考であったことであり，私はそれを帰国してから明確に認識した。

翻って，ふだん接することのある学生，研修医の方々を見ると，彼らの主たる情報源は，以前として，母国語の日本語で書かれた教科書や試験対策本が圧倒的に多い。機械的丸暗記を助けるために作成されたような「安直な試験対策本」が，唯一，学生時代に購入し，使用した本である，という学生も少なくない現実を垣間見ている。

他の国の学生と接していると，日本の学生との実践的知識やスキルでの圧倒的な差を感じざるを得ない。その大きな原因の1つは，「情報源の差」であると私は感じている。何を使って勉強しているのか，どのような信頼性のある情報を扱っているのか，が大きなカギを握っていると考えている。

医師，ナース，そのほかのコ・メディカルなど，医療にたずさわるプロフェッショナルが，このグローバル化の時代において，その専門領域における「世界の潮流」を把握することは，至極当然の職務責任である，と私は考える。「何を情報源にするのか」，この点に注意しながら，日ごろの学習，研修やトレーニングに臨むと，これまでと異なる世界が広がるかもしれない。

その意味でも，本稿でご紹介する黒川清先生著の『大学病院革命』，また同じく『イノベーション思考法』『世界級キャリアの作り方』などをご参考にしていただくと，私が強調したいことがわかりただけだと思う。

■米国滞在で得た気づき

私は2000年末に、当初の目的であった米国環境での診療トレーニングを終了し、一時帰国した。その際にはじめてお会いした、当時東海大学医学部長の黒川清先生のずば抜けた発想と行動力に、非常に感銘を受けた。「日本人離れしている」というのが、最初の印象であった。また、このような方が母国日本にいらっしゃることが“救い”のようにも感じていた。当時の私は、「米国的な発想」が自分のなかでも無意識のうちに「常識化」しており、その「無意識の米国」と、「現実的な自分の周囲の日本」との葛藤で、かなり苦しんでいた時期でもあった。

一時帰国したこの2000～2002年の間の滞在経験により、私の人生は大きな転換をすることになる。当時の私は、まだまだキャリア途上でステップアップしたいとの希望もあり、2002年に再渡米した。そして希望していた更なるトレーニングと経験が得られた後、私は、一時帰国当時にはあれほど「嫌っていた日本」に、みずから帰国することを選択したのである。

そして2005年4月から、国内の大学病院に勤務し始めた。再帰国した時点では、日米での診療経験、文化的かつ人的な国際交流の経験も自分でもかなり豊かになったと自覚でき、両国を客観的にみられるようになっていた。さらに、「日本」という位置に立つことにより、在米中には養うことが難しかった“世界全体を、より俯瞰的に”，つまり、1視点に偏らずに見るような心の余裕ができた。在米中は、どうしても、米国中心主義、米国＝世界の中心といった発想に、無意識のうちになっていたことを自覚できるようになった。

2005年の帰国後は、上記のような経緯から個人的な思いが深まり、「日本の医療をなんとか改善したい」「日本の学生、研修医の方に、より良い教育環境を提供したい」「日本の患者さんに最良の医療を提供したい」との思いから、日々の診療・教育にあたるようになっていく。

そのような中で、世界的なグローバリゼーションが進行し、インターネットで情報が全世界同時にパラレルになる(同時共有できる)時代が到来、発展し、日本も、医療に限らず、あらゆる分野で、世界とどう向き合うかを問われる時代になってきた。

■“白い巨塔”を解き明かす

私は、日本の医療を考えると、その基盤である、医学部とその医局講座制、“白い巨塔”と称されてきた大学病院の歴史を知ること抜きに、医療全体を改

善することが不可能であることを、本書『大学病院革命』で学んだ。

「なぜ、日本の医学部教育では、臨床的なスキルを重視してこなかったのか」「なぜ、日本の医学部教育では、学生教育のなかに、いまだ、世界の多くの国の医学教育と比べ、実践性と即戦性を備えたカリキュラムが少ないのか」「なぜ、あれほど過少の医療従事者の人員で、教授1名が絶大な権力をもつピラミッド型の封建制的な『医局講座制』が、明治維新以降100年あまりも継続できたのか」などの疑問にこの本は答えてくれた。

黒川先生はその著書の中で、日本の立場を説明している。“日本は、島国である。島国なので独自の発展を遂げてきた、ゆえに、他の国とは違って当然である”，との発想は、俗に「島国根性」というのかもしれない。江戸時代に300年近く続いた「鎖国」が、日本人の国民性、精神性に、多大の影響を与えてきたことはいうまでもない。

ところが、同じ島国という立地条件でも、常に外国の波、外国の侵入を受けてきた英国は、日本とはかなり異なる状況である、と黒川先生は説く。多種多様な民族と文化が入り乱れている状況である。

「賢者は歴史に学び、愚者は経験に学ぶ」という。『大学病院革命』は、医療従事者向けでなく、一般向けに書かれた本であるが、日本の医療史を学ぶ教科書でもあり、「なぜ日本の医療が、いま、こうなっているのか」を考える際に、その「理由」や「歴史」を検証しながら教えてくれる本である。初対面のときから常にメンターとして、また究極のロールモデルとして目標にしてきた黒川清先生の、祖国日本への情熱がうかがえる本書を読んで、あらためて非常に感銘を受けた。

日米でのご活躍、現在では、世界中を飛び回り、文字通り、グローバルオピニオンリーダーとして大活躍されている黒川清先生が、帰国後のキャリア、日本への貢献へのまとめとして、また、全身全霊を投入した、まさに渾身の一冊とも思えるこの本を、多くの方にぜひ読んでいただきたい、と感じている。

医療従事者として、あるいは、一般市民として、あるいは、いち患者として、「日本の医療はこうあってほしい」「このように変えたい」、こんなことを、この本を通して、考えてみていただければ幸いです。

●著者ホームページ：矢野(五味)晴美の感染症ワールド
<http://www.harumigomi.com/>